

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2014年9月21日

[テーマ] 貨幣に代わる絹

イタリア人作曲家ジョアキーノ・ロッシーニが残した作品に「絹のはしご」という珍しいオペラがある。秘密で結婚した上流階級の男女と、その事実を知らない婚約者や召し使いなどが繰り広げる喜劇色の強いオペラである。

タイトルの「絹のはしご」は、ひそかに愛し合う男女が夜の密会のために使う絹製のはしごにちなんでいる。なぜ、絹製のはしごなのか。

「絹のはしご」は、グリム童話の「ラプンツェル（髪長姫）」で、塔上に幽閉された娘ラプンツェルと、彼女とあいびきする王子の運命をつなぐアイテムとしても登場する。上流階級の娯楽であったオペラや、王侯・貴族が主人公の伝承物語では、優雅で高貴な絹は欠かせない存在であったのだろう。

洋の東西を問わず、絹は、富と権力の象徴として扱われ、金融経済史においても特別な役割を担ってきた。貨幣としての役割もその一つだ。わが国の貨幣史において、平安時代後期は銭貨が使われなかった時代として知られている。

「和同開珎」（708年発行）に始まる「皇朝十二銭」は、「乾元大宝」（958年発行）を最後に新たな銭貨は発行されなくなった。銭貨の流通が途絶えた11世紀初めからの約150年間、わが国は金属貨幣の空白期であったが、この時代に銭貨に代わり貨幣として用いられたのが絹、麻布、米である。

中でも10世紀に生産が拡大した絹は、銭貨に代わる重要な貨幣として機能した。貨幣の使用は、こうした絹、布、米の時代を経たのち、12世紀半ばに中国から輸入した渡来銭（宋銭）の時代を迎えることになる。

ところで、この時代の物品貨幣の流通範囲にも特徴があったことがわかっている。畿内以西においては米が中心であったのに対し、東国では絹や布（麻布）が中心であった。当時、東国の中核的な地域となっていた当地では、絹が貨幣として様々な取引において重要な役割を担っていたに違いない。

藤岡市の上栗須遺跡から、わが国最初の貨幣である可能性が高い「富本銭」^{ふほんせん}が発見されている（永らく日本最初の貨幣と考えられてきた「和同開珎」も十数枚見つかっている）。

奈良の都から遠く離れた場所で、このような例はほとんどない。当時の政治の中心であった近畿地方や九州地方などを除いた地域において、ここ群馬の地がとりわけ経済的に進んでいた地域であったことを物語っている。

仕事でも趣味でも、「絹」の存在を意識して見直してみると、新しい発見が尽きないことに驚かされる。これは当地に赴任してこなれば得られなかった経験だと思う。「絹」との関わりがどの地よりも強い当地で、「絹」を通した世界観を築いていけることの喜びを感じている。

〔 日本銀行前橋支店長
富田 淳 〕